

きぶのたむ

NO.108 月刊

第五輯 記念碑篇 澤七子
昭和十二年六月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町一五五号 垣方
吉備親老協会

○ 修堤碑 (その二)

△ 古谷龜藏はソマの倉敷市中島に住し、明治維新以後、西栗坂、徳芳、島羽、中左の戸長に就任した人である。この碑は三十八歳の時である。父を龜右工門といひ、中島村の領主戸川橋本守安清に仕えた庄屋の家柄である。

備中村に「都窪郡中島村 五百三十石ニ斗六升 古谷龜右工門」とある。龜藏治の子を博といひ、長く中庄村(ソマ倉敷市)の村長を勤めた。その子奇が現在の地主で長く中国銀行に勤めていたが、退職後は御星に帰り、回屋敷に住し倉敷市倉蔵貞友との公暇を勤めた。屋敷の背山に累代の墳墓、父数十基ある。

古谷氏畧系

龜右工門——龜藏治

明治四十二年八月廿四日 北 六十一才

光徳院祥雲泊陽居士

博 昭和十五年八月五日 北 七十一才
頭法院敬然持菊居士

——齋 明治廿五年生 当主

△ 沢田龍雄は四松山藩士(ソマの高梁市)の世で、庭瀬藩士の郡代持筒高五十石二人持持と余んだ沢田多治右工門鶴齋の養子である。齋藩佐庭瀬、中田などの代長を勤め、大正十一年八月廿八日八十四歳で逝去した。この碑は四十五歳の時である。龍雄は背が低く小柄であつたが、眼鏡を著し、村民に對してなかに

く、氣むつたといふ。

沢田氏畧系

嘉永二年八月十一日 北 七十五才

六郎兵衛幹敷 時在院宗貞日缺居士

——多治右工門朝久

明治五年八月四日 北 七十三才

金吾 養子

朝高 松山藩士三浦義方の次男

嘉永七年七月六日 北 廿四才

慈眼院誠清日親居士

龍雄

養子 松山藩士田結退山の二男

天保十年八月八日生 八十四才

大正十一年八月廿八日 北

△ 高尾仙作は西坂の京津(ソマ倉敷市)

大地主高尾俊助に養嗣した人である。明治以前西生坂 三田 西坂 子位庄 浅奈村の戸長に就任した。この建碑は四十八歳の時である。当時十倉町歩の田畠を有し、融福を家庭であつたが、晩年に花造製菓業を創め、数人の雇人を備うて手廣く販売に従事した。公正な性格のため、経営に数なりす悪者収支に行詰り殆んど田畠を売却せしめられた。それに息子の格夫はこれからといふ年の三十七歳で病死した。妻の小遊は

黒住教の道に入り、教師となつた。二人の間に秀雄の外二人の子があつたが、いづれも病弱で早くこの世を去り、嫡子秀雄も昭和三年に世に病死した。小遊は不幸にレ

三年後に五十九歳で病没して、直系は全く絶えてしまつた。そのあとには新島筋にあたる高尾 隣が家系を継ぎ、京津の四宅に住んでゐるが、本屋は朽壞したので、長屋門の残



して取毀し新しく居宅を建てて住んでゐる。
萬尾家畧系

俊助 明治二年正月八日死
本深院堂阿信士

仙作 養子
明治四十四年九月十五日死

格太 七正二年九月十五日死

秀雄 昭和三年八月廿五日死

憲章 義雄居士

昭和六年二月十五日死

二人 早世

三十二才

仙作以下の墓標に法名がない。これは小遊幾が神道に入つたので佛式によらなかつたものと思われり。

△ 大田始四郎は手野村（いま吉備町）の庄屋大田恒四郎の養子である。備中村鑑に一賀陽即手野村田領主陣屋三徳（いま総社市）蒔田敬馬介鑑太郎 七百石 大田恒四郎し。とある。始四郎は実は吉備郡川辺村（いま廣瀬町）の田家日枝文敬の次男で、大田家の後目相続になつた。この碑は始四郎二十九歳の時である。妻は恒四郎の長女八千代である。明治十五年始四郎が五十九歳の時妻は二十四歳で病死したのち恒四郎と迎えられたのが合津藩士手代本勝作の長女元枝である。その間に生れたのが総と收である。收は帝國七学を卒へく山一証券会社初代社長になつたが、こと志と違ひ昭和十三年五月廿八日四十九歳で自ら生命を絶つた。（第九輯人物叢書四号参照）
始四郎は慶應後旧延友、手野 東花屋 西花屋村の戸長を勤めた。
大田家畧系

恒四郎 明治十八年六月廿九日死

康太 啓吉郎 大田区久々京町七九五に住す

清岳院直居士 五十五才

始四郎 養子 昭和三年十月九日死 七十一歳

全心院康如居士

総 一 進（在東京）

康二

（大田家の墓所は西花屋八幡山にある）

收 子孫は東京都渋谷区尾三丁目一七の二五に住す。

△ 田 屋敷は手野ニの八番地、旧国道に面した南側にあり。二重造り瓦葺屋根にしく、太田 総リ門標があるが、いまは借家になつてゐる。

△ 難波讓太郎の父を八藤太といひ、代々下極川の庄屋の家柄である。備中村鑑に「極川領主や川方並助達敏には元寶陽郡三田村 九十五石六斗三升八合九勺 難波八藤太」とある。讓太郎は安政三年の生れで明治十六年二月十六日から下極川、中極川、大田村の戸長を命ぜられたが、明治十九年八月十五日廿三歳で病死した。この碑に同年十二月とあるのは生前の功によつて碑文に刻まれたものと思ふ。讓太郎に男の子がなかつたので、一人娘の好子に倉敷市大島の岡野多喜治の次男身二を婿養子に迎えたのである。

昔からの田屋敷は下極川高田ニ七四番地にして子孫はここに住んでゐるが、昭和四十年足并川改修工事のため建物の一部が取毀され、現形は失われしまつた。
難波家畧系

八藤太 明治五年三月十一日死

讓太郎 明治十九年八月十五日死

好子 明治十九年一月四日死

五十四才

世三才

身二 養子

昭和十六年十二月十六日死 六十三才

妻 宣江 明治四十四年五月廿七日生

興隆村日笠院の三女

郁子
愛子
圭子

(母の増人物益参照)

中西政愛は其先祖は備前國の出北にして中興庭園藩主松倉氏に仕へた家臣である。板倉氏家臣帳(明治二年)に外様中小性高八石三人扶持 中西八兵吉とある。明治維新後落座、川入などの戸長を勤めた。墓所は觀音院内にある。

中西家畧系

四十八歳

其四郎若工門次保 嘉永七年十月十九日死

政愛 天保十三年七月十日生

妻 の元 明治十年七月廿六日死

政愛院御應妙善大姉 七十六歳

妻

興志 天保十四年六月廿日生

明治廿五年九月五日死

手野村野崎通禮の五女

銀太郎

隨雲院即到居士 三十二才
天文三年九月廿八日生

政原

未京部回里区碑文谷一丁目一八二に住す

女三人男一人

龍治竹太郎は妹尾崎村(福田村)の大庄屋龍治藤平の長男にして安政四年に生れた。父の嗣を継いで里正となり村政に盡した。この碑は三十才の時である。数年にして暇を解して燕川精米會社、在野銀行などを興した。選はれて郡會議員になり土木事業などに盡した。晩年は御里に引籠つて書画に樂み或は園芸にも親んだが、大正二年十一月廿二日八十二歳で他界した。その子を醇という。明治十七年の生れで早稲田大学商

六五

科を卒業し莫大の金、紡績會社などを創設しまた政治にも関與して岡山県立憲青年會を組織し若くして県會議員に推され進んで副議長に就任したが同もな病氣に罹つて隠退した。大正十三年八月五日四十五才の働きさかりで病没した。妻は始め久米郡神目のお家治部有太郎の娘綾子を娶り一男一女をもうけたが、家庭との折り合ひが悪く離別した。綾子はいま米國のサンフランシスコ市に健在という。その子の藤平が嗣を継ぎ子孫は岡山市に住してゐる。当主は藤平の子直孝(廿七才)である。右妻に兵庫県の某を迎えたが縁がなく一年たらずで離別した。次の後妻を迎へたのが妹尾町大前所に住するおと妹尾領主戸川氏の家臣であつた佐藤静尾の次女政子(二十六才の時)と婚して一男一女をもうけたが、結婚して五年目に夫醇にさされた。男の子の國二は大東亞戰爭に出征し、昭和二十年三月十七日二十三才を南洋ホルネオ島で戦死した。女の子の政子は岡山市西大寺町の商家竹原某に嫁いたが、昭和二十年六月廿九の岡山空襲で焼き死さし着のみ着のまま逃れ、いまは福田村で母親政子とともに暮らしてゐる。

龍治氏は妹尾領主戸川近江守遠助に仕へた庄屋で、備中村鑑に「窪屋郡妹尾崎村百七十八石 龍治氏一郎同太郎右エ門」とある家筋である。前記に述べた榎川精米所は、いまはなつたおとのおとは下榎川四六八番地の地蔵である。ここは藩政時代榎川氏の知行所であつた屋敷跡である。日清戰爭のためこの精米所は本部のあつた兵庫が戦後廢されたのを自然中止したという。また在野銀行は、いまの本町中国銀行の前身である。後ちに山陽銀行となりついで中国銀行に吸収されたのである。

旧龍治家の屋敷は現在福田村妹尾崎二九三番地にある。大東亞戰爭后所有の田畑九町

は農地改革によつて二束三文で小作人の手に終り、生計の途を絶れん家屋の修理も意に委かせず荒れ果てて緋練造りの萱葺屋根の本屋は朽壞のまゝに放たれてあり、僅かに東を殿と離れ庭敷のみを他人に取りかえてソる。庭園は西に山を覆ひ、全盛時代の面影を残してソるが名を知らぬ雑草がたざらに繁茂するのみ。

龍治家畧系

考名工門幸昌

嘉永五年一月十三日北五十八才

妻 千賀

貞勝院実應智親大姉

明治十年四月廿六日北七十六才

妻 某姓伯氏

清老院智艶妙誉大姉

清水宗一の次女

女(先妻の子)

竹太郎正隆

大正二年十一月廿二日北五十七才

妻 縫

岡山の中吉氏の出

考一郎分家

女二人

康平

妻 茂

大正三年生岡山市下西川(柳町)野中殿三郎の女

野中殿三郎の養子野中四郎は陸軍少尉にして昭和十一年二月廿六日特赦廿三名、下仕官千四百人帝

都に暴動を起し死刑になつた。

文子

(在東京)

國二

昭和二十年三月十七日二十三才大東亜戦争に戦死

武子

岡山市西大寺町竹原東に嫁ぐ

龍治家の墓地は妹尾崎の丘にある。

一、龍治幸昌之墓

顯考龍治氏諱幸昌 稱考右工門 源家昌未孫 昌延之長子也 家盛而吉為村長

君自幼好學 恭儉黷悟 遠不事情 嘗受賞被命帶刀 在其軀也 竭忠施智

而極懋百性 如子見饗 特賑給之其切 驗不可訾託矣 嘉永四年辛亥 歸附

居 置酒以樂生命 族(姪子)圍一月十三日罹病没 享年五十有八 葬于邑東

輝庵先塋之次 法謚曰勇勝軒德應諱親嗚呼哀哉 因記不朽云

孝子 長昌謹誌

幸昌室本州賀陽郡故清水村清水宗一の次女 稱名千賀也 維時明治十年丁

丑四月廿六日 以壽七十有六年 謚 貞勝院実應智親大姉

一 清老院智艶妙誉大姉

慈母名千代 本州窪屋郡倉敷村塩籠惟清長女也 龍治長昌為 後妻 生二男三

女 彌勉從事而家 益成四支 明治十一年戊寅八月廿有三日罹病終没 時享年

五十

一 龍治康平長昌之墓

翁諱長昌 稱康平龍治氏 芳名其号 考曰考右工門 妣清水氏 翁其長男天

資敏治 十八歳始為里正 尋為大里正際於明治維新為邑長 剛望風為灣 組織明倫社 計利用厚生興民風改善 其後遷為県會議員 於是乎地方嗚然風靡 家賢念忽 富令聞愈揚 先配佐伯久産一女 後配塩館氏女二男二女 次男孝一郎別稱 家若夫 翁性行之許 則中洲三島先生既盡焉 余又曷述

大正十四年五月 興讓館長 山下 崇 撰

大原孝次郎書

龍光院賢徳長昌居士

龍治竹太郎夫婦之墓

居士諱正隆 稱竹太郎 考曰康平 妣塩館氏 居士其長男 資性温厚 弱冠為 里正 廢藩後 為保長 戶長 尋推為村長 固辭不受之專 投身實業社会 興撫 川精米会社 庭淑銀行 為海所得稅調査委員 郡會議員 郡参事 會員等 架設橋 梁改修道路 組織信用組合矯正者 後 縱養成 勤儉美風 晚年嗜書 畫 究回什栽培 梅菊不知老之將至而不幸 大正二年十月二十二日 溘焉而逝 享年五十七 配 中吉氏 孝一男五女 右記性行一斑云

大正十四年五月

興讓館長

山下 崇 撰

大原孝次郎書

大成院篤実冠昌居士

大慈院松身貞操大姉

昭和十一年一月二十二日

行年 八拾二歳

龍治 醇夫婦之墓

余嘗聞之 龍治氏 查有人 祖考芳谷先考正隆君 昔一方泰斗也 君諱 醇 正隆長 男 母中吉氏 君資性寬厚 頭腦明晰 幼卒 中學校 入早稲田大學商科卒業 創設莫大小

会社 紡績会社 興立 憲青年黨 選為県會議員 尋為副議長 滿期 還隱 專治家政 無緣 以興望所侵 遂不起 實大正十三年八月五日也 春秋僅四十有一 夫若假之年 則利 用厚生 必能裨於世 可惜 夫老室 治許氏 誕一男一女 大姉 健室佐藤氏 孝一男一女 右記 梗概 刻墓北有云

大正十四年五月

興讓館長

山下 崇 撰

大原孝次郎書

賢照院醇篤義全居士

この碑は昭和四十一年三月足守川堤防拡張工事のため取り除き他に移轉することに決 まつた。觀みると八十餘年前家祖父足守川泥濘によつて莫大な財産を失ひ被害を蒙つ たので、足守川流域の世一ヶ村（いまは高根 吉備 庄 福田）の戸長が巨額の費用 と、時の郡守部長、県知事の援助を得て改修せられた貴重な記念碑である。現代の 御主人たちはその恩恵を想起し、保存すべき親則はなにとしとせぬが、静かに道義に立脚し 永遠に文化歌として現存を享受することなく後世に伝へるべき性質のものではなから うか。是れが現代人の義務であらう。

（おわり）

各種タンボール

製造

吉備町下撫川

一三二〇

大善紙工業株式会社

飲食物 式

山陽線庭瀬駅前 よしや旅館

吉備局電三五二・三五三番

吉備局電三一九番